

世界の文字・中国の文字・日本の文字 漢字の位置付け再考

シュテファン カイザー*

キーワード: 文字体系, 表語文字, 表音文字, 内在型音符, 明確化作用

要 旨

中国の文字体系と比べて、全体としての日本の文字体系は「世界の文字」の中で従来あまり注目されず、文字学ではむしろ漢字から発達した仮名文字に興味が集中した。

本稿は文字のタイポロジーとその問題点を概観してから、中国の体系と3大表語文字体系であるエジプト、シュメール、マヤの体系との相違点の分析を行う。とくに、3システムにおける象形文字内部に表音性が備わっていないことや、それにともなうて同じ象形文字が補音符などとして早い段階で使われるようになった点に注目する。それに対して、中国の漢字が量的に他のシステムと比べて圧倒的に多い事実は、その文字に内在する表音性によるもので、他のシステムのような文字の表音的使用が発達しなかった。以前から一部の人がいっているように、中国の漢字は形態素音節文字というべく、表語文字ではない。その考えの正当であることは最近の実験の結果でも確認できる。

日本のシステムにおける漢字は、中国の場合と違って基本的に一字多音である。そこでエジプト、シュメール、マヤの体系と同様に多読字の読み方は文脈に頼るだけでなく、送り仮名など表音文字で補助的に示す傾向がある。エジプト、シュメール、マヤの文字体系を表語文字と呼ぶなら、日本語のシステムもその範疇に入れることになるが、同じ漢字を使う中国語のためには別の分類が適当である。

1. 文字¹の分類と問題点

Taylor (1899) のイデオグラム・フォノグラム以来、文字を表意文字と表音文字に二大別する考え方が一般的である。日本でも文字を表音文字と表意文字とに二大分するのが普通だといえる²。

* Stefan Kaiser: 筑波大学文芸・言語学系教授。

¹ ここでいう「文字」は、主として「文字体系」の意味で使うが、場合によっては個々の文字を指すこともある。さらに「文字体系」は「発達した文字体系」のことで、Gelb (1952) のいう文字の先駆的段階は含まれていないものとする。

² たとえば、日本語教育学会編(1982)では次のようないい方をしている。

すべての文字は表音文字と表意文字に大別される…… (: 471)。

最近、表意文字に代わって「表語文字」という呼び方が増えてきている。

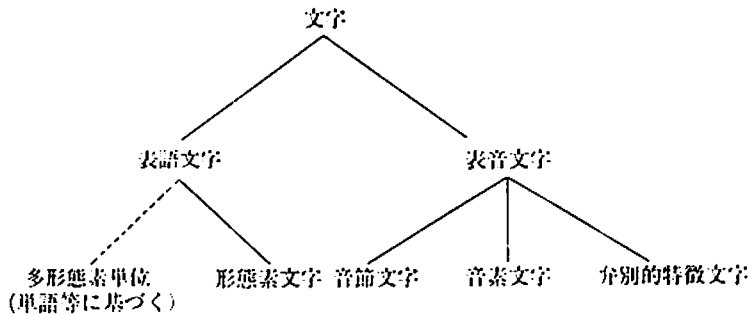


図1 Sampson (1985: 58) による文字の分類

イデオグラム以外には、ロゴグラム(表語文字)やモルフォグラム(表形態素文字)などの用語も使われるが、後述のように用語の使い方からみて、どちらの用語も音の単位を表わすものではなく、意味の単位を表わす場合が多いのである。

表語文字は普通それ以上下位分類されないが、表音文字は音節文字と音素文字に分けることが多い。たとえば、Sampson (1985) における世界の文字分類をみると、図1で示す内容である。

Sampson は、さらに弁別の特徴文字 (featural system) を設けており、ハングル文字がその範疇に当たるものとするが、一般的であるとはいえない。それから、表語文字がさらに多形態素文字と形態素文字に分けてあるけれども、多形態素文字は可能性としては認めているものの、実在の例がないという。したがって、表語文字は多形態素単位ではなく³形態素文字だけということになる。

それぞれのタイプにどこの文字体系が入っているかというと、形態素文字に中国の漢字が入れており、音節文字には線文字B、音素文字にはセム文字とアルファベット文字が入っている。日本の文字も扱っているが、表語文字と表音文字による「混合システム」(mixed system) だとしている。

しかし、そもそも文字というのは、言語音を書き移す実用的な手段である性格⁴が強い。そのような性格上、文字に常に付随する問題の一つはその不統一性である。同レベルでは律しきれない、異質なものが共存するのが普通である。たとえば、「音素文字」といわれるアルファベットでは /m/ や /k/ のように一字で一音素を表わすものもあれば、x のような、一字で /k+s/ という二音素を表わすものもある。後述のように、エジプト文字の場合には同じ文字が表語、音節、

³ 図1の「表語文字」の下位分類にあたる「多形態素単位」へ伸びる線が実線ではなく点線になっているのは、単語ベースの文字体系は実在しないという意味である。

⁴ Bloomfield (1933: 21) の次のような有名な言い方がよく引用される。

文字は言語を記録するものだけであって、言語ではない ("Writing is not language, but merely a way of recording language by way of visible marks.")

音素、さらには限定符という、四通りの使い方が可能であった。漢字を例にとっても、象形・指示・会意・形声などのタイプがあって、漢字はどんな文字かを考える際、どのタイプに重きをおくかが問題となる。

複数の使い方が行われる文字体系が決して例外ではないから、Gelb (1952: 199) がいつているように、混ざりけのない純粋なシステムがそもそも存在しない⁵。そうなってくると、混合システムなどといったところで、ある文字体系の性格をとらえたとはいえないことになる。むしろ、どの使い方が典型的であり、その文字体系の位置付けに一番適当であるかという検討が必要になる。

文字の下位分類で、日本の文字の位置付けを行う時みられるもう一つの特徴は、文字の進化論的な考えによる扱い方である。文字進化論の立場では、常に象形文字が先にあって、それが音節文字を経てアルファベット文字に至っている。したがって、「日本の文字」として文字学の対象にされる場合にみられる一つの特徴は、漢字から発達した仮名文字に注目して、日本語では一般に仮名が単独に使われていないことを無視したような形で「音節文字」としての仮名に的をのぼることが多い点である(たとえば、Gelb 1952 や DeFrancis: 1989 等)。

本稿は、同じ漢字を使用している中国と日本の文字体系を同じように考えていいかどうか、今までのアプローチで欠けていると思われる他の文字体系との比較の観点から考えるものである。

2. 文字タイプと数の関係

文字のタイプ分けは、以上で触れたような問題点があるため、量的な側面から客観的な判断を行おうとする試みもある(たとえば、Gelb 1952: 115 や Coe 1992: 43)。表1はそれらに筆者の判断でデータなどを加えたものである。

表1の中には、上限と下限を示す項目があるが、それは共時的に普通に使われるもの(使われたもの)と、一般的でなかったものを区別した。

表1によると、ある文字体系が20から35ぐらいの文字を使っていれば、まずアルファベットと考えられ、それが40~90ぐらいになると、音節文字の体系である可能性が大きく、数百字以上になると、表語文字という目安になるということである。その尺度でいくと、中国のロロ文字⁶ (DeFrancis 1989: 148) や日本の万葉仮名が表語文字ということになり、一つの目安になるとはいえ必ずしも正確ではないモデルである。しかし、後述するように中国の文字と他の表語文字と数の上であまりにも違うことはタイプが違うのではないかという印象を与えるものである。

⁵ “There are no pure systems of writing just as there are no pure races in anthropology and no pure languages in linguistics.”

⁶ もともとは8000字以上使われたと推定されるが、1975年に819字に統一された。現在はアルファベットにとってかわった。

表 1 文字体系と文字数関係のモデル

文字体系の種類	文字体系	文字数
表語文字	シュメール	500- 2,000
	エジプト	500- 3,000
	マヤ	200- 800
	漢字	10,000-50,000
音簡文字	線文字 B	73-87
	ペルシア	40
	かな	47+
音素文字	英語	26
	ロシア語	36
	アラブ語	28
	ヘブライ語	22

3. 古代三体系の特徴

古代の四大文字体系(シュメール, エジプト, 中国, マヤ)の中で現在も使われているのは中国の文字(漢字)だけで, 他のシステムはいったん使われなくなった結果読めなくなり, 19世紀あるいは20世紀になってやっと解読が成功して再び読めるようになった。そしていずれの場合にも解読を可能にしたのは, それぞれの文字体系が特徴的にもっていた表音的要素に他ならなかった。その表音性はどのような性質のものであったか, 以下少し詳しくみていきたい。

3-1. エジプト文字

前述したように, エジプト文字の場合にはさまざまな使い方があって, 次のア～オがそれである。

- ア 象形文字(ヒエログリフ)
- イ 限定符(意符)
- ウ 一子音字母
- エ 二子音字母
- オ 三子音字母

文章での使い方としては, 以上の5種類の機能を組み合わせることが普通であった。字母の組み合わせだけの場合, あるいは字母の組み合わせ+限定符の場合もあったが, 象形文字と字母, または限定符のケースが典型である。象形文字は日本の漢字と同じように二つ以上の「読み」をもっているのが普通であるが, 象形文字そのものには読み方に関する情報がついていなかった。

そこで、読みを助ける手段として次のようなことが行われた。

1. 象形文字に字母をつけて読み方を助ける方法(補音符)。
2. 象形文字に限定符をつけて読み方を助ける方法。
3. 以上1,2の組み合わせによる方法。

限定符は漢字の部首と似たような役割をするもので、それ自体は発音されないが、意味範疇を示す。字母にはいろいろな使い方があったが、一つの単語を書き表わす文字グループでの使い方は以下で示すとおりである。例はローマ字表記で示すが、象形文字を大文字で、補音符を小文字で表わす。限定符はその意味を括弧に括って示す。文字と文字の境目は+で示す。以下も同じ方針でいくが、エジプト文字特有の象形文字として読まれることを表わす縦棒は|で示す。

書き方	読み方	象形文字の意味	全体の意味
YRT +t	yrt	目	目
y+YRT+t+t (乳瓶)	yrtt	乳	乳
MSDGR	msdgr	耳	耳
MSDGR+m	sdgm	耳	聞く
s+MSDGR+d+m	sdgm	耳	聞く
y+d+ (耳)	ydy		盲
NBT	nbt	竈	竈
NBT +t	nbt	竈	竈
NBT	nb	竈	すべて
NBT+ (男)	nb	竈	主人

以上のように、象形文字は表音文字としても使われ、その場合には類音 (MSDGR → sdg), または約音 (NBT → nb) として読まれる。それから、限定符として用いられることもある。

単語の一部しか書き表わさない場合もあるが、一般に書き表わす単語がもっている子音(母音は普通書き表わされない)よりも多くの子音(あるいは半母音)を書いているのが特徴である。その余分な子音はもちろん二度読みはせず、実際読まれないもので、日本語の振り仮名の役割に似ている。したがって、字母は他の字母との組み合わせなどで純粋に表音的に使われる場合以外には象形文字の読み方を明確化する機能がある。

文法的機能をもつ要素(前置詞、助詞、指示詞)が主として字母で書き表わされる。たとえば、n (に、のために)がその例となる。

以上のような文字の使われ方は本質的には同じ単語などを書き表わす場合にいろいろな組み合わせが可能で、実際は『万葉集』などにおける戯書のような使われ方もあったが、全体としては一語などに相当する決まった文字群を使用する傾向が強かった (Schenkel 1976: 7)。つまり、スペルの慣習化が起こり、一種の正書法ができあがったのである。

3-2. シューメル文字

シューメル文字・楔形文字は世界最古の文字といわれるが、シューメル語そのものがあまりよく分かっていないためまだ不明の点が多い。エジプト文字と違うところは、漢字と同様に会意や指示の原理も象形文字と並んで使っていることであるが、中国語と同じような一語一音節が多かったせいか、一文字が多くの読みをもつようになった。

そこで読みをはっきりさせるための手法として二つの方法が使われるようになった。限定符はエジプト語と似た方法だが、語の前にも後にも置かれた。たとえば、一つの象形文字で以下の例で示す二つの読みがあったが、「鋤」と読ませるためには「木」を表わす限定符(象形文字)を添え、「農夫」と読ませるためには限定符(象形文字)「人」を付けた。

(木) APIN/ENGAR → APIN (鋤)

(人) APIN/ENGAR → ENGAR (鋤を使う人、農夫)

この手法は漢字における部首の使い方(後述)と共通している。次に補音符の使い方をみると、象形文字を音節文字として多音字に後置する。DU(「足」などの意味)という象形文字は補音符によって他に次のように読ませた。

GUBba(運ぶ) → Gub

TUMma(立つ) → TUM

以上の例が示すように、象形文字の最後の子音を頭にもち、母音 a などで終わる象形文字を音節文字として利用し、エジプト語の場合と同じく語の一部のダブるような形で添える。シューメル語は膠着語だったことと関係がありそうだが、Powell (1981) によると補助的音符は名詞の場合には表語文字の前にも現われるのに対し、動詞の場合には普通後につくという。限定符の数は少なかったようだが、前述のように名詞の前にも後にもつけていた。

3-3. 古代マヤ文字

古代マヤも象形文字を使っていた。基本的に単字である点ではエジプト文字と同じだが、限定符は使わなかったようである⁷。象形文字は多くの場合一字多音であり、さらに音節文字としても使えるものがある。たとえば、同じ文字に以下のような読みが存在した(Coe 1992: 235)。

CAUAC (19 日め)

HAAB (365 日の年)

TUN (360 日の年)

cu (音節文字)

⁷ 西田龍雄(1981: 16)では、「雨」という限定詞があるとしているが、Coe (1992: 263)によると、これは kul(聖なる)と読まれるもので、言語音と対応する以上、限定詞とは認められないことになる。

音節文字を象形文字と一纏まりにして組み合わせる点では、エジプト文字にもシューメル文字にも共通したところがあるが、正書法があまり成立しなかった点ではシューメル文字により近いといえる。たとえば、「盾」という象形文字が7世紀の「パカル大王」の名前に使われたが、次のようなバリエーションがみられる (Coe 1992: 207).

PACAL

PACAL+la

pa+ca+la

ここでも音節文字(小文字表記)が、象形文字に付随している場合には読み方のヒントを与える役割を果たしており、それ自体読まれない。発音を示す補音符はこの例では後についているが前、あるいは前・後の両方につけることもあった。こうした使い方の場合には象形文字より小さく書くのが普通で、一語の纏まりにするのが普通であった。マヤ語の語根は CVC という一音節のものが多く、抱合語のタイプで、接頭・接尾語などをつけることによって一語でも一文相当の場合もある。文法的要素はエジプト語などの場合と同様に音節文字で書き表わすのが普通であった。

3-4. 表語文字三体系の共通点

次のような点が共通した特徴としてとらえることができる。

1. どのシステムも比較的早い段階⁹で表音文字が発達して、表語文字といっしょに使われるようになった。
2. 表音文字が使えたにもかかわらず、どのシステムも表語文字を捨てようとしなかった。
3. 補音符は典型的に表語文字の一部とダブっているから、あくまでも補足的な機能を果たしている。つまり、記憶想起や明確化の役割を果たしている。
4. 表語文字自体には表音性が働いていない(補音符をつけるのがそのためである)。

4. 中国の漢字は表語文字か

以上、三種の文字体系では、表語的文字の数が500字あるいはそれ以下に落ち着いて、増える傾向にはなかった。その理由の一つとして考えられるのは音節文字・単音文字が発達し、併用されたことである。もちろん、どういったタイプの言語を表記するかということも考慮に入れなければならない要素の一つであるが、何とんでも漢字といちばん大きく違っている点は、表語文字自体に表音的な要素がなかったことである。

⁹ Falkenstein (1936: 34/40) が指摘しているように、ウルク IV 層出土の粘土版ではすでに men (王冠) が表語文字+補音符 en の形でみえる。

漢字の場合には、伝統的には六書などといっていくつかのタイプが区別されるが、象形 (pictograph)・会意 (rebus writing)・仮借 (homophony) は他のシステムにもみられる。それから六書では分類として立てられていないが、限定符 (determiner)、つまり意符による意味内容の限定も、程度の差はあるがマヤ文字以外の体系に共通している。

ところが、他の体系と大きく違う点は、漢字の内部に音符といわれる要素が圧倒的な割合で存在していることである。歴史的にみれば、漢字の場合にも音符が補音符としてつけられたものもあるにちがいない⁹。しかし、万単位の文字を可能にしたのは、ある音声を書き写した文字に限定符をつけて発展させた原理であったといっても過言ではない。発達段階での表音性は、現在よりはるかに強いものであったと思われるが、DeFrancis (1984: 105-110) の推定では、現代中国語でも有用な表音性を有する漢字の割合は 64-72 パーセントとされている。ちなみに、日本語の音読字の場合には当用漢字の有用表音度がほぼ 9割と報告されている (宮島他編 1982)。

日本では「形音義」説がいまだに普通に行われており、漢字そのものが意味を有している考え方が定説である¹⁰のに対して、西洋ではむしろあらゆる文字体系が言語音しか表わせない考え方が主流である。

Chao (1968: 105) が、その点を漢字と他のシステムの比較についてさらにはっきりさせる。

中国の文字が意味を表わすのに対し、音節文字やアルファベット文字が音を表わすといえは誤った二分法になる……重要な違いは単位の長さとその種類・数である¹¹。

Chao のいう「単位の長さ」だけ考えると、中国語の場合には明らかに音節になる。種類・数になると、上でみてきた数量的分類では「表語文字」になり、使い方の上からも同音意義語を書き分ける特徴からも基本的には形態素単位となる。もっとも、珊瑚や葡萄などのように一つの漢字が一形態素に対応しないものもあり¹²、単音節言語とはいえない現代中国語における漢字と形態素との結び付きがどの程度信用できるかという問題もある¹³。「珊瑚」のような語彙には外来語と考えられているものが多く、中国語の外来語表記における漢字の使い方にもつながるが、多音節語に対し分析的に音節単位を当てること自体は漢字＝音節単位の意識の存在を示すものとも解釈できる。

⁹ 河野 (1953/70: 12) によると、「禾」が甲骨文では「年」という意味にも使われ、混同を防ぐために音符「人」をつけて区別した。

¹⁰ たとえば「漢字は形・音・義の三要素を有している」(国語学会編 1980: 189)。しかし、なかには野村 (1988: 105) などのように、漢字が直接に意味を表わさないという研究者も例外的にある。

¹¹ “.....it is making a false dichotomy to say that Chinese writing represents meaning and syllabic and alphabetic writing represents sound.the important difference is that of size and variety of units.”

¹² このような二字語彙の場合には多く同意符が付いており、その語全体の意味範疇を示しているところがエジプト文字などの限定符とよく似ている。

¹³ たとえば French (1976: 112) が広東語で一字で書かれる *mouh* [ベキン語の *mei you* にあたる] をあげて、*mh* と *yauh* という二つの意義素に分析できるという (声調省略)。

中国語の漢字のラベルづけは以前の象形文字 (pictograph) や表意文字 (ideograph) から、表語文字 (logograph, morphograph, morphologograph など) へと変わってきたといえるが、DeFrancis (1984: 147) がいうように、表語文字を表意文字の意味で使っている人が多い。DeFrancis (1989) は、漢字が形態素音節文字 (morphosyllabograph) であるとし、Chao (1968) と同じ名称に落ち着く。つまり、第一には音節文字であり、第二には形態素を表わす文字だということを意味する名称でもある。もっとも、この名称は Coulmas (1989: 107) のように、第一に形態素・第二に音節というように誤解する可能性は含んでいるのが問題である¹⁴。

以上のような考え方は、発達した文字体系があくまでも音声言語と並行して言語音を表わすという文字論一般¹⁵の立場からも肯定できるし、実験的にも確認されている。たとえば、漢字の読み書きにおける誤字やその把握が意味よりも音による結果が Hayes (1988, 中国語について) や Horodeck (1987, 日本語について) によって報告されている。同様の結果が最近アイ・カメラによる日本語の読解の測定からも出ている (Matsunaga 1994)。因みに、日本についてのものはいずれも音読字を対象としている。

このような観点から、少なくとも中国語の漢字は一義的には音声言語の単位、つまり音節文字であり、二義的にはその言語単位に付随する意味の単位を表わすものであるといえる。そう考えてくると、中国の漢字のためには表語文字とは別のタイプをたてる必要が生まれる。そして、このタイプは文字の数がたいへん多く作れる特徴(つまり、内在型音符の原理による)をもっていることになる。

5. 日本語の文字体系と他の四システム

日本の漢字の場合には、中国語のような一字一音という関係にないことが大きな違いである。一つの字には典型的に音と訓があつて、原則的に一字多音 (polyphonous) のシステムになっている。一字多音のシステムの場合には、すでに中国のシステム以外の三システムでみてきたようにある文字、あるいは文字列を「どう読むか」が問題となる。もちろん、文脈がもっとも強力な明確化作用をもっているが、一字多音システムの実際の使い方をみると、文脈に頼るだけでは不十分のようで、他の情報も併用されることが多い。

日本語の場合もその例外ではなく、読み分けを助ける情報がエジプト文字などとよく似た形で一部において存在する。たとえば、活用語の送り仮名がその読み方を助ける形で示しているといえる。書く・斯く・核¹⁶、あるいは後・後ろ、細い・細かい、食う・食べる、食べ物・食物など

¹⁴ "Every Chinese character stands for a morpheme and for the syllable into which it is clad."

¹⁵ ただし、音声言語と文字言語が違う体系をなしていると考える人もいる、たとえば Haas (1970)。

¹⁶ この場合は補助記号がないことが音読みの印といえる。

もある字の読み方を明確化する (disambiguate) 機能ももっている。

中国語を含む他のシステムと比べて違う点は、日本語の表記には数種類の文字が併用されていることである。歴史的には、万葉仮名や宣命書のように同じ漢字を音節文字としても使っていた段階があって、宣命書の場合にはマヤ文字の表語文字と表音文字をサイズで区別したのによく似ている。それから万葉仮名で助詞などにある程度決まった、形の上で単純な漢字を使っていた点はエジプト文字のように同じ大きさの文字を表語的にも表音的にも使う体系でも、文字群(単語単位)と単独文字の視覚的印象の違いを利用して前置詞など文法的要素を使い分けたのに似ている。

現在の同じ漢字から派生的にできた仮名文字は、視覚的に漢字と違うところの機能を備えてきているといえる。三種の文字の使い分けは、ある程度流動的ではあるが目安となるルールはかなりある。たとえば「可能」や「実家」や「民主化」などの /ka/ は、ひらがなやかたかなの領域外になっており、逆に「か弱い」、「から」、「行くか」などにおける /ka/ は、ひらがなの領域で、漢字やかたかなは使わない。文字列の中での「正書法」も漢字の読み方の明確化に役立っていることもみのがせない。単独で送り仮名なしで使われる漢字はふつう音読されることや、送り仮名を含んでいない二字漢語(「食べ物」に対する「食物」の類)や四字漢語が一般に音読されることなど。

6. 日本の文字体系の性格

上述のように、日本語における漢字の使い方が中国語の漢字と大きく違う点は、一字一音ではなく一時多音で、しかも漢語的要素と和語的要素の両方を書き表わすという、二つの使い方があることである。

漢語を表わす場合の日本の漢字は、中国語の漢字に近い使い方であるといえる。一つの漢字に相当する音声言語の長さの単位は基本的に一応音節(短・長)と考えられる。例外はある(たとえば /ichi/ や /aku/ など)が、少ない。歴史的にも一音節だったのが一部多音節に変わった傾向が認められ、日本語に外来語を取り入れる時に音節数が増える傾向の一つの現われである。日本語特有の漢・呉音などの別があるが、その読み分けは主として熟語レベル語彙の知識によって行われる。ただし、文脈に頼る場合もある(たとえば、「期」の読みにおいて)。

和語の場合には、一字に対応する音声言語の単位の長さがまちまちで、一音節から数音節までの範囲である(下記のように、一字に対応する言語単位を分析できない場合もある)。そして、その音節(群)が相当する単位としてはまず単語と形態素が考えられるであろう。

単語(酢・塩・魚など)

形態素(安い・安物など)

さらに, Unger (1986: 236) がいうように¹⁷, 漢字と送り仮名の境界線が多くの場合に形態素と形態素との境界線に合致しないし, 熟字訓などの場合にはそもそも境界線などあろうはずがない。たしかに, たとえば「書かせる」「起きる」はそれぞれ *kaka-seru*, *oki-ru* と分析され, /ka/, /o/ では形態素とはならない。この問題には仮名文字では, 王段動詞における語幹と活用語尾の境界線がそもそも正確に表記できない側面もあるが, 「起きる」のようなケースでの送り仮名は, 読みのヒントを与えるということで明確化作用を果していると考えられる。

熟字訓や宛字の場合には, たとえば「悪阻」・「五月雨」, 「流石」・「矢張」などのように, 複数の漢字で形態素・単語を表わすことが多い。中国語の「珊瑚」などのように一字一音節という対応はないが, 複数字で一形態素を表わすところは似ており, 訓読みがもともと翻訳である点では「珊瑚」の「珊」や「瑚」が形態素として存在しない意味では共通するところもある。

ひらがなは, 中国以外の三システムでの表音文字と同様に助詞など文法的要素を表わす機能も持っているが, 日本語では多音性の表語文字である漢字の読み方を明確化する性格も備わっている点でも三システムにおける補音符に似た役割を果している。

日本語の漢字には音読の場合には内在型音符による, 中国語の漢字と同じような表音性という性格もあり, その使い方に限っては一字一音節という言語単位の長さも中国語の場合とよく似ている。しかし, 日本のシステム全体を考えると, Gelb (1952) のいう「混ざりけのない純粋なシステムがそもそも存在しない」立場(上述参照)に立った場合には, 基本的にはエジプト, シューメル, マヤの文字体系の性格とよく似ている文字体系である結論になる。一字多音の表語文字を使っており, その読み方の明確化には表音文字であるひらがなにある程度頼っており, 文法的要素も表音文字で書き表わす点などがそうである。エジプト, シューメル, マヤの文字体系を表語文字として位置付けした場合には, そこへ日本の文字体系も当然入れるべきである。一方, 中国の漢字には別の分類が必要になり, 形態表音節文字などが一部において提案されているが, 「表音節文字」なども考えられる。

日本のシステムにはかたかなもあり, 以前はひらがなと位相の面では違っていたが, 他の面ではよく似た使い方をしていた。しかしここ百年位の間には新しい使い方が生まれてきており, 全体のシステムの中での位置付けもしなければならぬが, 今後の課題としたい。

¹⁷ "Many breaks between kanji and okurigana do not coincide with morpheme boundaries; the "boundaries" implicit in *jukujikun* are false by definition, as are the "morphemes" represented by *ateji*."

参 考 文 献

- 河野六郎 (1953/70) 「諧声文字論」, 『河野六郎著作集』第三卷 (文字・雑纂), 平凡社.
 ——— (1977) 「文字の本質」, 『岩波日本語講座』8「文字」, 岩波書店.
 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』, 東京堂.
 西田龍雄 (1981) 「世界の文字」, 西田龍雄編 『「世界の文字」講座言語』第5巻, 大修館書店.
 日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』, 大修館書店.
 野村雅昭 (1988) 『漢字の未来』, 筑摩書房.
 宮島達夫他編 (1982) 「図説日本語」, 『角川小辞典』9, 角川書店.
- Bloomfield, Leonard. 1993. *Language*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
 Chao, Yuen Ren. 1968. *Language and symbolic systems*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Coe, Michael D. 1992. *Breaking the Maya code*. New York: Thames and Hudson.
 Coulmas, Florian. 1989. *The writing systems of the world*. Oxford: Blackwell.
 DeFrancis, John. 1984. *The Chinese language: Fact and fantasy*. Honolulu: University of Hawaii Press.
 ———. 1989. *Visible speech: The diverse oneness of writing systems*. Honolulu: University of Hawaii Press.
 Falkenstein, Adam. 1936. *Archaische Texte aus Uruk*. Berlin: Deutsche Forschungsgemeinschaft.
 ———. 1959. *Das Sumerische*. Handbuch der Orientalistik Abt. I, Bd. II, 1ster. u. 2ter Abschn. Lief. 1. Leiden: Brill.
 French, M. A. 1976. Observations on the Chinese script and the classification of writing-systems. In *Writing without letters*, ed. W. Haas. Manchester: Manchester University Press.
 Gardiner, A. H. 1915. The nature and development of the Egyptian hieroglyphic writing. *Journal of Egyptian Archaeology* 2: 61-75.
 ———. 1957. *Egyptian Grammar: Being an introduction to the study of hieroglyphs*. 3rd. ed. Oxford: Oxford University Press.
 Gelb, I. J. 1952. *A study of writing: The foundations of grammatology*. Chicago: University of Chicago Press.
 Haas, William. 1970. *Phono-graphic translation*. Manchester: Manchester University Press.
 ———. 1983. Determining the level of a script. In *Writing in focus*, ed. F. Coulmas and K. Ehlich. Berlin: Mouton.
 Hayes, E. B. 1988. Encoding strategies used by native and non-native readers of Chinese Mandarin. *Modern Language Journal* 72, no. 2: 188-95.
 Horodeck, R. A. 1987. *The role of sound in reading and writing kanji*. Ph.D. diss. Cornell University, Ithaca, New York.
 Kennedy, George A. 1951. The monosyllabic myth. *Journal of the American Oriental Society* 71, no. 3: 161-66.
 Matsunaga, Sachiko. 1994. The role of sounds in reading kanji: Pedagogical implications. Paper presented at the MIT/ATJ Conference on Teaching and Learning of Japanese, MIT, 25 March 1994.

- Meltzer, Edmund S. 1980. Remarks on ancient Egyptian writing with emphasis on its mnemonic aspects. In *Processing of visible language* 2, ed. P. A. Kolars, et al. New York: Plenum Press.
- Pope, Maurice. 1975. *The story of decipherment*. London: Thames and Hudson.
- Powell, Marvin A. 1981. Three problems in the history of cuneiform writing: origins, direction of script, literacy. *Visible Language*, XV, no. 4: 419-40.
- Pulgram, Ernst. 1976. The typologies of writing-systems. In *Writing without letters*. ed. W. Haas. Manchester: Manchester University Press.
- Sampson, G. 1985. *Writing systems: A linguistic introduction*. Stanford: Stanford University Press.
- Schele, Linda. 1982. *Maya glyphs: The verbs*. Austin: University of Texas Press.
- Schenkel, W. 1976. The structure of hieroglyphic script. *Royal Anthropological Institute News* 15: 4-7.
- Unger, J. Marshall. 1986. Review article. *Journal of the Association of Teachers of Japanese*. 20 no. 2: 232-40.